

【追悼】

花岡正男先生を偲んで

学友会副会長 名誉教授 西谷 源展(44回生)

私が先生とお会いしたのは京都医療技術専門学校が京都医療技術短期大学になる前年の昭和 63 年であったと思う。短期大学の教員に就任する人たちの顔合わせが初めてであった。京都大学ウイルス研究所の所長をされていた偉い先生と思っていた。当時は現在のコロナウイルスほどではないが、エイズウイルスが多く話題となっていたところで、その道の権威でもあり、全国各地で講演もされていた。

年代が昭和から平成に変わった平成元年に、専門学校卒業生の待望する短期大学が開学した。この時に初代学長として就任された。先生と初めてお会いした時からの印象は温厚で、優しく、医家の家系で育ちがよく、医師というより高名な研究者という感じであった。

当時、短期大学として発足したが専門学校学生の2,3年生が在籍し、同じ校舎に同居する形となっていた。専門学校教員は鳥山英明校長、山田勝彦先生、藤本信久先生と私の4名が専任教員で残りは外部の非常勤講師で授業が行われていた。専門学校の教員もいずれは短期大学教員に就任するが、当初は専門学校と短期大学の兼任であった。短期大学設立に関わった短大設置準備室は、そのまま専門学校・短期大学の事務も引き継ぐ形となった。ある時、事務局は短期大学設置に必要な実験装置・設備などは短期大学学生用で専門学校学生には使用させないと言い始めた。

短期大学と専門学校という関係に花岡学長は悩まされたと推察する。しかし、同じ校舎で学ぶ学生の事も考え、専門学校学生にも分け隔てなく使用できるようにしていただいた。短期大学教員は専門学校教員と外部から9名の教員が採用されており、その連携を図るために毎日の昼食を学長と教員全員及び事務局長が同時に同じ部屋で会食して、いろいろな話題と共に教員間の連携を図り、意思疎通ができるようになったことは小さな短期大学として重要なことで花岡学長ならではの発案であった。

教職員の採用でも高名な先生を招聘され、小谷正彦先生(熊本大学医学部教授)、山下佐明先生(奈良女子大学教授)などを専任で、そのほか外部講師も著名な先生を招聘されている。

花岡先生は、いろいろな国々を旅行され、グルメでもあり、ワインをこよなく愛飲されていた。ある時、教職員で「暑気払い」と称してバーベキューパーティーを開催したときには自ら得意のチーズフォンデュを作りご馳走してくださった。

平成10年に3期務められた学長を退任された。7月11日に京都センチュリーホテルにて教職員、短期大学卒業生が多く参加して退任祝賀会が開催された。その時に退任のあいさつを「学友だより」に寄稿されている。学友会については、啐啄同機(そったくどうき)と題して学友会を高く評価されている。啐啄同機とは禅語で、意味は卵が孵化するとき、卵の中から雛が殻を嘴(くちばし)で割ろうとする。同時にこれを助けるように親鳥も外からこのタイミングで殻をつつく、これが一致するから雛鳥はこの世に生を受け、羽ばたくことができる。学友会は卒業生の教員を含めて、時には厳しくしかりつけ、時には親や兄の代わりのごとく優しく面倒を見てくれる姿であった。まさに啐啄同機であると評価されている。在任中は学友会総会や全国の支部総会にも多く足を運んで、卒業生との交流も深められた。

現在、母校は立派な大学に成長したが、専門学校卒業生の積年の願いを短期大学として実現し発展させ、大学への発展の礎を作っていたいただいたと思っている。

これまでのご功績に感謝し、先生のご冥福をお祈り申し上げます。



医療技術短期大学昇格記念



ご厚情に深く感謝

高橋 一男(短大1回生)

花岡先生の訃報に接し、先生の在りし日のお姿を偲びますとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

私が入学した年は、元号が昭和から平成に替わり、学校も専門学校から短期大学に替わった、京都医療技術短期大学最初の学年でした。新天地、新校舎において、全国各地から集まった学生は不安や好奇心一杯のなかで、学生生活をスタートさせていました。私は、花岡先生から講義を受けるだけでなく、京都医療技術短期大学1期生の自治会長の立場で、地域の方々との交流を深める場でもあった秋桜祭、他校学生の交流の場でもあった近畿地区専門学校体育大会等のイベントでご相談させていただき、先生には的確なアドバイスでご指導いただきました。私達が上級生のいない学生生活を不安なく楽しく充実したものにできたのは、先生のご指導のお陰と改めて感謝申し上げます。

また、イベント後の打ち上げなどで、先生に京都の美味しいお店を教えていただき、ご馳走になり、先生や同級生とお酒を酌み交わし、色々な事を話し、時には議論を交わした事が今も懐かしい出来事となっています。

今となっては、私は、当時の花岡学長にはどの同級生達よりも多くて、間近に接する機会が与えられ、さらにお酒の席もご一緒させていただき、貴重な機会を与えられていたのだと思っております。花岡先生のやさしく穏やかでにこやかなお姿が思い出されます。1期生で上級生がいない状態で、ともあれば自由奔放な状態の我々に温かく肝要に接していただき、花岡先生、ありがとうございました。

これをもって哀悼の意に代えさせていただきます。



花岡正男先生を偲んで

磯田 裕子(短大1回生)

花岡正男学長のご逝去の報に際し心からお悔やみ申し上げます。

短大の入学式で初めてお会いした時、京大のウイルス研究所の所長も務められたような先生なので、まさに『雲の上の人』でとても緊張したことを覚えています。気軽にお話しさせていただけるとは思っていなかったのですが、実際はとても気さくなお人柄で、数か月もすると女子学生の人数が少なかったこともあり、女子みんなを学長室に招いてくださり楽しくお話しさせていただきました。先生も1期生には特別目をかけてくださっていて、学生会を終えた時には慰労会と称して学生会の役員全員を先生の行きつけのお店に招待していただいたこともありました。

卒業してからはご自宅が私の職場近くであり、お会いする機会が多くありました。在学時は数少ない女子で、学生会にも入っていた私は先生の記憶に残る学生だったようです。そのため、いつお会いしても「やあ、磯田さん久しぶり。元気にしているかね、仕事はどうだ？」と声をかけていただいていた。

花岡学長と最後にお会いしたのは3年くらい前ででしょうか。ちょうどこの日はお互い時間もあり、ゆっくりとお話をさせていただきました。その当時、すでに90歳を超えていらっしゃいましたが、さすが、と言いますか記憶は衰えていらっしゃらなくて、私が今も同期と連絡を取っていることや子供が医療系の仕事に興味を持っていることなどをお話したら、懐かしそうに当時の昔話をしてくださいました。「今度、同期数人で集まろうと話しているんです。」とお伝えしたところ誰かな？と聞かれたのでAさんとBさんとCさんと・・・と言うと「うんうん、覚えているよ。」と昔を振り返ってくださり、私たちをよく見て下さっていたのだな、と改めて思いました。

何度となく「君たちの学年は僕にとって特別なんだよ」と言っておられました。私たちは短大の1期生で花岡学長の最初の生徒ということもあり、特に印象に残っているようでした。

お話を終えてお帰りになられるときに「お元気で、また。」とお伝えした私に「ありがとう、また。」と返してくださった先生の笑った顔が今でも忘れられません。今までありがとうございました。

合掌

花岡先生を偲んで

皿谷 弘樹(短大2回生)

花岡先生、謹んでご逝去を悼み生前の温かいご指導に対しあらためてお礼申し上げます。

先生にご指導賜ったのは、私が何もかも未熟だった30年以上も前になります。病理学だけではなく、学生自治会活動の相談役として温かい指導を賜りました。

先生の講義は、笑いと驚きで溢れていました。医療の知識が全くない私にとって、ずっと集中して聴講するのは大変でした。しかし、そんな空気を察してか、「解剖実習用の献体を保存している京大の冷蔵庫に昼食のおかずを入れる学生がいて、他の学生がそれと間違えて献体を食べてしまった。」とか「肝臓はウイルスの塊だから決してナマでは食べないように。」など刺激のある話を織り交ぜた講義のおかげで何とか集中力を保つことができました。ちなみにこの話を聞いて以降、好物だった生レバーを食べないようにしたのは言うまでもありません。

平成2年の学園祭のテーマをどれにするか相談にお伺いしたときの話です。学生投票で「僕らの学校ミニ原発」と「正男と愉快な仲間たち」の悪ふざけしたようなテーマが選ばれてしまったのですが、「いくらテーマが面白くても大学の評判が落ちるようなもの、学生主体のイベントに学長の名前は必要ないんじゃないでしょうか。」と叱ることなく微笑みながらやんわりと再考を促していただくことができました。

また、その学園祭で催した雀荘に鳥山校長と二人でお越し下さいました。雀士を目指すほど結構な腕前の学生相手でしたが、ポーカーフェイスで何牌待ちなのか全く悟れず気がつけば勝負あったで次元の違う強さを発揮されました。鳥山校長とニコニコ話しながら牌を打つ先生のお姿が、印象的で深く心に焼き付いています。

今後は先生が講義、自治会活動、イベントなどを通して教えて下さった「温厚な心」を忘れることなく、精進して参りたいと思います。

先生のこれまでのお導きに心より感謝し、安らかに永遠の眠りにつかれる事をお祈り申し上げます。

合掌

正男とゆかいな仲間たち

仲田 篤夫(短大3回生)

私は平成3年当時、京都医療技術短期大学の1年生でした。ちょうどこの年は、専門学校から短期大学になったその完成年度ということで、文部省の方々が視察に訪れている所をたまたま見たことがあります。管轄が厚労省から文科省に変わるの、それまでと勝手が違って色々大変だったと伺っています。

その2年後にはバブルが崩壊し、先生はまた別の激動の時期を経験なさいます。受験生が激増して、今までの会場では収まらないと花岡学長は笑顔で頭を抱えておられました。先生はそんな鳥津学園の大事な時期に学長を務められました。

そんな完成年度の10月、私は大きな不祥事に当事者として名を連ねます。詳しくは記しませんが当時の新聞の1面に掲載され、その日のNHKの全国ニュースでも取り上げられた大惨事でした。わが母校の名前が悪い意味で全国に報道されたのです。私は短大の先生方や職員全員に迷惑をかけました。花岡学長のお顔にもドロを塗ってしまいました。いろんな方々に謝罪に行き、職員の前でも謝罪しました。すると当時の教務課長さんがこう言いました「仲田、もうええ。もうたくさん頭下げたやろ。わしらにはもうええ。下げている頭はよう叩かれへん。」その時そばにいた花岡学長はうなずいて「そうや」と言って下さいました。技師になれば、花岡学長のいるこの母校にはできる限りの恩を返そうと決意した瞬間でした。

この不祥事が影響してその年の秋桜祭はいつもの活気を自粛しようということになり、とても静かなものになりました。当時の自治会メンバーにも迷惑をかけました。せっかく面白いテーマタイトルも考えていたのにボツになりました。しかし、その翌年の秋桜祭でこのテーマタイトルを使うことが決定します。そのタイトルは「正男とゆかいな仲間たち」花岡学長にも許可をもらいに伺いました。先生は「はあ？」という表情をなさいましたが、結局は「まあ、ハハハ、ええやろ」と苦笑いで許可を下さいました。

花岡学長は専門学校時代からの校風を少しも損ねないように学習環境を保ち、講師陣を整え、学生たちを支えるスタッフたちの温かさを支えられました。春3月、花岡学長の訓示を受け、学び舎を巣立った者たちは今、各地で何人も医療人として、放射線のエキスパートとして社会のために役割を果たしています。花岡学長の功績は今も生きています。先生ありがとうございました、どうぞ安らかに。

あなたのあの一言がなかったら、私はダメになっていたかも知れません。

以上

*通巻 244 号 2022 年 7 月 10 日発行(2021-No.2 より)